

東北レインボーだより

2016年活動報告

あたたかなご支援、ありがとうございます。

昨年もあしなが育英会東北事務所では、仙台、石巻、陸前高田のそれぞれのレインボーハウスでの活動を中心に、東日本大震災で親をなくした子どもとその家族の交流プログラムを実施してまいりました。ご支援いただきました皆様に、活動のご報告と感謝の気持ちをお伝えいたします。

2016年の活動報告

2017年の幕が開けました。皆様には継続的に東日本大震災で親をなくした子どもたちに、あたたかいご支援を賜り心から感謝申し上げます。2014年に宮城県仙台市、石巻市、岩手県陸前高田市にレインボーハウスを建設し、2015年から本格的な交流活動を展開してまいりました。ここに2016年の活動のご報告申し上げます。

右記にあるとおり、震災から月日が経過するに伴い子どもたちも成長しています。未就学児が小学生となり、小学生が中学生となり、中学生が高校生となり、高校生が大学生や社会人として社会へ巣立っていく。当たり前のことですが次ページに紹介しているように成長するにしたがって、一人ひとりにそれぞれの悩みが出てきますし、進路をどのように決めるかなど親がいない中でさまざまな選択をしなければならない状況が生まれてきます。

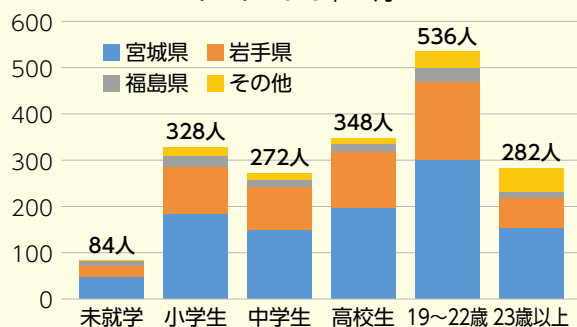
2016年は、年齢別に参加するプログラムの選択肢が広がるように工夫した年でした。小中学生が中心となる日帰りのワンデイプログラムを3館で実施することを柱に、「宿泊のつどい」を開催したり、「中高生のつどい」、「大学・社会人のつどい」を開催したりと、年齢別のプログラム開催に力を入れました。また被災地宮城、岩手、福島だけでなく全国に移り住んでいる中学生までの震災遺児を対象とした「全国震災遺児のつどい」も開催し、全国から23人が参加しました。全体でのべ861人の子どもと430人の保護者が参加しました。

また、なかなかレインボーハウスに足を運べない家庭に対して、家庭訪問を実施しました。7月から12月にかけて宮城県、岩手県を中心に131軒を訪ねることができました。その中で震災から5年以上過ぎた「今」やと語れる「あの時」を話してくださる方が多かったように感じます。震災は時間的に

は過去になっていきますが、その影響は現在進行形でさまざまな形で現れています。

加えて3館それぞれの地域のニーズに対応しながら、子ども支援団体を中心に貸し出し、地域交流の場として使っていただきました。「レインボーハウスに来る参加者の表情が、他の会場のときと違って和やかなんです」という声もありました。

2017年は2016年以上に子どもたちのニーズに対応し、彼らの人生の歩みを支える活動を展開するとともに、「地域の交流」支援も視野に入れて進んでいきたいと思っております。

特別一時金申請者の自治体別・年齢別一覧
データ:2015年11月

各地プログラム人数集計 (のべ人数) 2016年1月~12月

開催地	回数	内容	子ども	保護者	合計
仙台	24	仙台ワンデイプログラム	97	54	151
	7	来館促進プログラム	103	48	151
	9	宿泊や日帰りの交流プログラム	104	35	139
	40	仙台計	304	137	441
石巻	11	石巻ワンデイプログラム	101	55	156
	13	交流プログラム	95	51	146
	2	来館促進プログラム	18	10	28
	36	学習支援	103	10	113
	15	保護者清掃	2	29	31
	77	石巻計	319	155	474
岩手	15	陸前高田ワンデイプログラム	85	21	106
	2	宿泊のプログラム	31	14	45
	5	陸前高田以外でのプログラム	39	28	67
	4	来館促進プログラム	6	40	46
	16	共催プログラム	60	35	95
	2	学習支援	17	0	17
44	岩手計	238	138	376	
	161	総合計	861	430	1291

遺児たち、そして保護者へのインタビュー

2016年、あしなが育英会東北事務所の活動の中で交流した子どもたちや保護者の方に、胸のうちをお話ししていただきました。小学生、中学生、高校生、大学生、そして保護者の方々。さまざまな思いを抱えながらも、夢や目標に向かって歩む皆様に、こちら元気をいただいたように思います。

多くの支援を受けてきた自分だからこそできること。

佐々木理紗子さん(釜石市出身、盛岡大学4年生)2016.1

「夢に近づくことができたのはうれしい。何より地元に戻れることが一番よかった」佐々木理紗子さん(22)は中学生の時から、子どもたちの成長に毎日携われる仕事に憧れていました。春に念願だった「地元で幼稚園の先生」になります。

地元釜石は「自分の一番の居場所。心のより所」大学に進学し地元を離れたため、帰るたびに街並みが変わり、復興が進む証とを感じる一方で、だんだん昔を思い出せなくなっていきました。そして「声や、しぐさ、ぬくもりなど、五感で感じていたことが、どんどん思い出せなくなっているのが辛い」と話してくれました。

理紗子さんは東日本大震災で、母親、祖父母、おばをなくしました。震災から2週間後に母親を見つけた時は、ただ悲しく涙しました。「母がいなくなったという事実を今も受け入れていない気がする」

だからこそ少しでも子どもたちの心に寄り添い「あなただけが辛いんじゃないって、わたしもそばにいるからね」という気持ちを行動で示したくて、レインボーハウスのファシリテーターになりました。震災について子どもたちに語り継いでいくことも自分の使命だと今は感じています。



小学校入学の記念に自宅前で撮影した家族写真。母親の純子さん(中央)、父親の雄治さん(後右)と一緒に



ファシリテーターとしても活躍。陸前高田レインボーハウスでの様子(2015年12月20日)

家族の夢ひろがる。姉と弟、仲よし兄弟の新入学。

平野響くん(小学1年生)、初音ちゃん(中学1年生)2016.4

「大きくなったら野球選手になりたい。楽天イーグルスに入りたい」そう話してくれた平野響くん(6)。お姉ちゃんの初音ちゃん(12)は「将来お医者さんになって、発展途上国の人たちの力になりたい」と話してくれました。

2人のお父さんは5年前の東日本大震災で被災。内陸に住んでいることで、周りに同じ境遇の人が少なく苦勞もたくさんありました。仕事をしながら子育てをがんばってきたお母さんは「下の子のほうが『小学校でちゃんとやっていけるかな?』という不安はあります。でも、ここまで元気に育ってくれたので、たくさん友だちをつくってがんばってくれればそれでいいかなと思っています」と話してくれました。

初音ちゃんは、2014年からあしなが育英会とヴァッサー大学が共催で行っているコラボレーション

音楽会『世界がわが家』に、2015年から出演。2016年夏にはアフリカのウガンダで公演を行うことが決まっており、今はその練習をがんばっています。昨年の公演ではウガンダのエイズ遺児たちと積極的に交流していた初音ちゃん。「ウガンダの子どもたちはとてもフレンドリーで、言葉は通じないけれど、思っていることは一緒なんだって感じた」と話してくれました。



初音ちゃん、半年間で身長が3センチ伸びました



響くんも身長が5センチも伸びていました

カナダ、そしてオーストラリアへ。世界へ飛び出す夢を抱いて。

菅野哉文さん(岩手県陸前高田市、高校1年生)2016.9

菅野哉文さん(15)が6月の陸前高田ワンデイプログラムに参加した時、レインボーハウスの職員に「夏休みにカナダに行ってくる」と話していました。

哉文さんのお父さんは東日本大震災で被災しました。哉文さんが初めてあしなが育英会の交流会に参加したのは小学5年生のころ。交流会や開館日はもちろん、陸前高田レインボーハウスの地鎮祭や竣工式にも出席しました。高校生になってからも時間が合えば、時々ワンデイプログラムに参加しています。

哉文さんは、全国から集まった30人ほどの中高生と一緒にカナダへ。きっかけは高校で配られた、企業が実施するホームステイの案内でした。12日間の滞在中は、カナダの学校に通ったり、観光名所を見物したり、ホームステイ先でホストファミリーとの時間を過ごしたそうです。「楽しかったよ。船に乗って、ナイアガラの滝を近くで見たのが一番楽しかった」写真を見

せながら、そう教えてくれました。

哉文さんの通う高校では毎年、オーストラリアへの海外派遣事業が行われています。哉文さんは高校に入学する前から、この事業を利用してオーストラリアに行きたいと心に決めていました。そのために部活、勉強に励み、高校の友だちとのひと時を楽しみながら、目標に向けてがんばっています。



滞在先のカナダのお土産屋さんで、トナカイのぬいぐるみと一緒に

たくさんの人に支えられている。感謝を胸に、息子を応援。

保護者:小林公美さん(福島県相馬市)2016.7

小林公美さん(42)は現在、生まれ育った福島県相馬市で長男の亮太くん(17)、次男の哉斗くん(13)と暮らしています。夫のかおるさん(享年37)は、南相馬市で仕事で、東日本大震災の津波に襲われ、2ヶ月後に変わり果てた姿で見つかりました。

「周りに親をなくした子たちがいなかったし、気持ちを分かち合う場所がなかった」海から離れた内陸に住む家族は、心の拠り所を必要としていました。通っていた小学校で親を津波でなくした子どもは哉斗くんひとり。テレビで家族の映像が流れると「パパがいない」と泣き出し、精神的に不安定な日が続いていました。そんな折あしなが育英会から「全国小中学生のつどい」の案内が届き、哉斗くんの「ここに行きたい」という一言を受け、勇気を出して東京のレインボーハウスへ向かいました。

同じ境遇の人に出会い、「一人じゃない」と思えました。仙台開催のプログラムにも積極的に参加し、学校から「哉斗くん、心が落ち着き始めましたね」と言ってもらえました。亮太くんは海外招待プログラムを通じて、海外に興味を持ち、勉強に力が入るようにな

りました。

「息子たちにはたくさんの人に支えてもらっていることに感謝して、がんばってほしい」と公美さんは願っています。



夫・かおるさんの故郷長崎県に旅行、長崎ハウステンボスにて家族4人で



照れながらも親子仲良く写真に写ってくれた公美さんと亮太くん(2016.7)

東北事務所 職員から みなさんへ

〈西田正弘〉

親をなくすということは、全身全霊の体験でだれも代わることのできないものだという気づきが私の中に座っている。しかし「手助けする関わりはできる」とも。手助けする人をfacilitaterファシリテーターと呼ぶが、これからはレインボーハウスそのものが集う人たちの「facility、ニーズと出会いを手助けする場」にできたらと思う。



〈若宮紀章〉

町は少しずつ復興が進み、子どもたちも一人ひとり成長して、少しずつ前へ進んでいるように思えます。でも、レインボーハウスで遺児や家族と接していると、彼らの心の中は6年前の3月11日からまったく変化していないと思える瞬間が今も時々あります。これからも彼らの気持ちにいていねいに寄り添い、一緒に歩んでいきます。



〈三宅美奈子〉

保護者を担当して思うことは、「どうしたら保護者のみなさんの心が、ふかふかになるのか」ということです。もうすぐ6年になります。元気そうに見えても、大人は疲れていると感じます。子どもは元気になってほしいけど、大人にも元気になってほしい。そのためにできることを何でもやりたい、やり続けたい。そう思います。



〈富樫康生〉

2016年は変化の質が変わったように感じる。あの日から5年が経過して、ようやく住む場所が決まる人、新しい生活が始まる人、そしてその場に残って見送る人。それぞれの歩みの中で、何かしらの支援が必要になった時、制度があるだけでなく、つながる「誰か」が必要だ。その「誰か」を担う活動をこれからも続けていきたい。



〈菅野宏彦〉

今年もたくさん子どもたちがレインボーハウスに遊びに来て、笑ったり、泣いたり、おしゃべりしたり、爆発したり、自分の気持ちを素直に表すことがもっともってできる場所にできたらな。そして今年はみんながこれから生きていく中で、ちょっとだけ背中を押してあげる手助けができれば良いな～と思っています。



〈今野亜紀〉

この一年間特にレインボーハウスに來館していない方々との交流に力を注いできました。「助けてください」という保護者の方の声がまだ聞こえてきます。これからも遺児家庭の皆様へ寄り添えるように活動を続けていきたいと思っています。こうやって活動できるのも、ご支援者の皆様のおかげです。心から感謝申し上げます。



〈小川里奈〉

「家なんか流されればよかった。妻の服も、メモ書きだって残っているのに、子どもの成長を一番に、一緒に分かち合いたいだけがない」
2013年に会ったお父さんの言葉です。遺品整理しなくて済むから家が流されてよかったと話す人もいます。表現をそのまま受け止めることで、言葉の真意を知ることができるのだと思います。



〈山下高文〉

震災からもうすぐ6年。子どもたちと話していると、なくなった人の声や癖、震災津波の記憶が徐々に薄れていくことへの不安と戸惑いを教えてくれる場面があります。その度に今後も長く、寄り添っていききたいと思います。多くの人が「忘れない」「気にかける」といったことが、子どもたちの成長を見守るために大切なことだと感じます。



〈阿部結花〉

震災からもうすぐ6年。体は大きくなり、考えや言葉にも成長が見られる子が多くなりました。でも、なくなった親の話をする時は、「パパはね」「ママはね」と当時の年齢に戻ったような話し方をし、繊細な時が止まっているように感じます。今後も子どもたちが後ろを振り返った時、いつでも笑顔で迎える存在でありたいと思います。



〈長島明子〉

陸前高田レインボーハウス常勤スタッフの長島です。陸前高田レインボーハウスでは、従来からの活動はもとより、地域に根ざした活動にも貢献できるよう、子どもの健やかな成長を見守りつつ、がんばっていききたいと思います。まだまだ復興には時間がかかりますが、どうぞ応援方ご協力お願いいたします。



〈中村優一〉

新入職員の中村優一と申します。昨年は家庭訪問を通じて、約130件の遺児家庭との「つながり」をつくることができました。それを「持続する」「広げる」ことが今年の課題です。これからも、子どもたちや保護者の「聞いてほしい」にいていねいに耳を傾けていきたいと思っています。



ご寄付・郵便振替口座のお知らせ

皆様のあたたかいご支援ご協力のもとに、遺児たちの夢を応援できるよう、これからもしっかりと取り組んでまいります。

東日本大震災遺児への支援全般(心のケアプログラム開催費用など)へのご寄付はこちら

■加入者名:あしなが東日本大震災遺児支援募金

■口座番号:00130-7-776732